



三陸復興国立公園

記憶を未来へつなぐ
復興の海岸線

国立公園ものがたり

三陸復興国立公園

記憶を未来へつなぐ
復興の海岸線

国立公園ものがたり



記憶を未来へつなぐ 復興の海岸線

国立公園ものがたり

三陸復興国立公園と ともに歩む

目次

<p>04 三陸復興国立公園 日本で初めて、震災復興の歩みから生まれた国立公園</p> <p>08 [聞き書き] 長谷川晋さん みちのく潮風トレイル開通が契機に日本のハイキングカルチャーの大きな一歩</p> <p>12 [聞き書き] 柳沢卓美さん 文人墨客にも愛された種差海岸の自然と歴史を語り継ぐ</p> <p>16 [聞き書き] 上村繁幸さん いつもの仕事を漁船でクルーズ海の美しさと脅威を伝えていく</p>	<p>20 [聞き書き] 階ケイティさん 三陸海岸の復興の道のりを歩きながら伝える外国人ガイド</p> <p>24 [聞き書き] 千田勝治さん 失われた松原、再生に50年憩いの場を取り戻すために</p> <p>28 [聞き書き] 畠山信さん 牡蠣漁師が始めた「森は海の恋人」森を育て、人を育て、そして……</p>
--	--

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などとの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。本誌の舞台である三陸復興国立公園は、震災からの復興を象徴する新たな国立公園として、陸中海岸国立公園を拡張し、2013年に誕生しました。東北の太平洋沿岸を南北約250キロメートルにわたって貫き、断崖が続く雄大な風景や、豊かな森、漁村の暮らしが広がっています。自然の恵みと脅威を受け止め、人々が海とともに生きる道を探しつづけてきたことが、この公園の原点です。

また、2019年に全線開通した「みちのく潮風トレイル」は、青森県八戸市から福島県相馬市までをつなぐロングトレイルで、

震災の記憶と自然の再生を体感できる1本の道として注目されています。トレイルを歩く人々や地域で活動する方々の姿には、「これからの三陸」を作る力が感じられます。本誌では、森・里・川・海を舞台に、三陸の風景を受け継ぎ、人と人をつなぐできた人々の声を紹介します。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本の全ての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然と共に生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめなおし、次の世代、次の100年にしっかりと引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま文章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。

三陸復興国立公園

この地を襲った大津波は

森を、海を、町を、そして人々の暮らしを

大きく変えました。

それでも、人々は歩きはじめます。

海を見つめ、森を育て、

再びこの地で生きることを選びました。

風が運ぶのは、記憶と希望。

寄せては返す波のように、

人々の営みは、これからも続いていきます。

日本で初めて、震災復興の歩みから 生まれた国立公園

三陸復興国立公園は、青森県から宮城県まで直線距離で約250キロメートルにわたり、断崖や入り江が連なる雄大な海岸線を抱きます。海中の岩場や藻場には多様な生物が息づき、湾内には養殖イカダや漁港の風景が広がり、海とともに暮らす人々の営みが続いています。東日本大震災で大きな被害を受けながらも、自然の恵みと脅威を受け止め、人と海が再びつながるこの地に、三陸の新たな物語が生まれています。

指定年 | 1955年5月2日(前身となる陸中海岸国立公園として指定)
2013年5月24日(区域を拡張し、三陸復興国立公園として指定)
面積 | 陸域2万8539ヘクタール、海域7万2835ヘクタール
エリア | 青森県、岩手県、宮城県



三陸復興国立公園を歩く 「みちのく潮風トレイル」

みちのく潮風トレイルは、青森県八戸市から福島県相馬市までをつなぐ全長約1000キロメートルの長距離自然歩道で、日本で初めて「震災復興」を目的に整備されたトレイルです。2019年に全線開通し、海岸線を歩くナショナルトレイルとしても国内初の試みとなりました。歩く人は、豊かな自然や文化、そして被災地の人々との出会いを通して、三陸の今を体感できます。単なる観光ルートではなく、復興の記憶と未来をつなぐ「歩いて出会う道」として注目されています。

岩手県北部



北山崎

岩手県下閉伊郡田野畑村

高さ200メートル級の断崖が続く北山崎は「海のアルプス」と呼ばれる絶景。漁師によるサップ船クルーズでは、漁の経験を生かして海の美しさと津波の記憶を伝えています。

青森県



種差海岸

青森県八戸市

天然の芝生が海辺まで続く日本でも珍しい景観。文人や画家に愛されてきた風光明媚な地であり、海が月明かりに照らされて生まれる「月の道」も見どころです。

三陸復興国立公園 南部



三陸復興国立公園 北部



岩手県南部



碓氷海岸

岩手県大船渡市

黒い礫が敷き詰められた浜辺と、波が岩を穿つ「穴通磯」などの奇岩景観で知られています。松林や遊歩道が整備されたみちのく潮風トレイルの主要ルートでもあります。

岩手県中部



浄土ヶ浜

岩手県宮古市

白い岩肌と青い海の美しさが極楽浄土を思わせることからその地名が付けました。震災の記憶と再生の歩みを伝えるツアー、海水浴やカヤック、トレイルなど、多彩な体験が楽しめます。

宮城県



気仙沼湾

宮城県気仙沼市

南三陸町から気仙沼市にかけては、豊かな漁場と森が共存しています。唐桑半島の付け根、気仙沼湾の奥に位置する舞根湾では、「森は海の恋人」運動を通じて植樹や環境教育が続けられています。海と里をつなぐ人々の営みが、三陸の自然と復興の象徴となっています。

岩手県南部



高田松原

岩手県陸前高田市

かつて白砂青松の名勝として知られた海岸。夏には海水浴客に溢れた市民の憩いの場でした。東日本大震災で7万本の松が失われましたが、奇跡の一本松を象徴に、市民と行政の手で植樹・管理活動など再生に向けた取り組みが進められています。

三陸復興国立公園の特徴

南北に細く長い公園には、地域ごとに異なる風景と文化が息づいています。本誌に登場する主な景勝地をご紹介します。

聞き書き
長谷川晋さん

みちのく潮風トレイル開通が契機に 日本のハイキングカルチャーの大きな一歩



三陸復興国立公園を通過しつつ、公園外の地域にも広がる長距離自然遊歩道、みちのく潮風トレイル。青森県八戸市燕島から福島県相馬市松川浦までの沿岸地域を結ぶこの道は、2019年に全線開通しました。その立役者の1人が、ロングトレイルの開設や運営のコンサルティングに携わる長谷川晋さん。アメリカのロングトレイルにも挑んだ経験のある長谷川さんは、「みちのく潮風トレイルのあちこちでハイキングカルチャーが芽吹きはじめている」と話します。

はせがわ・しん／1978年、東京都荒川区生まれ。2010年にアメリカを縦断するパシフィック・クレスト・トレイルをスルーハイキング（※）し、その経験を後進ハイカーに提供。現在は一般社団法人トレイルブレイズ ハイキング研究所の代表理事を務め、日本における長く歩く旅、ロングトレイルの発展に奔走。2019年からみちのく潮風トレイルの運営団体である、認定NPO法人みちのくトレイルクラブ（MTC）のアドバイザーを務める。
※ トレイル全線を起点から終点まで通して歩くこと

三陸復興国立公園内を歩く みちのく潮風トレイル

この碓石海岸は、三陸復興国立公園内であり、みちのく潮風トレイルのルートにもなっている場所です。北のほうから歩いてくると、国立公園に入ったくらいから、それまでの森や海の雰囲気とガラリと変わるんです。こうやって維持されているきれいな松の森を見ることがすごく良い場所だなと感じます。

2019年に全線開通したみちのく潮風トレイルは、全長約1000キロメートルにわたる東北太平洋沿岸の長距離自然歩道です。初めてのセクションハイキング（※）は2016年10月。スルーハイキングは2018年から19年にかけてです。MTCの依頼を受けて、みちのく潮風トレイルのデー

ブック制作のために開通前のトレイルを調査したときでした。1回につき1〜2週間くらい、仕事の合間を縫って、何度かに分けて歩きました。当時はがれきが山積みに残っている場所もあって、防潮堤もまさに工事の真っ最中。だから、工事や観光客の人たちが、宿や商店にいったばい来てくれていました。その後、三陸自動車道ができて便利になりました。だが、車が国道を通らなくなり、地域には人が来なくなってきています。みちのく潮風トレイルを作っている当時から、「この賑やかさっていつまで続くんだろう」みたいな心配はあったんですけど、今こうして、トレイルができたことでハイカーたちが来てくれるようになり、少しでも役に立っているのなら良かったなと思います。

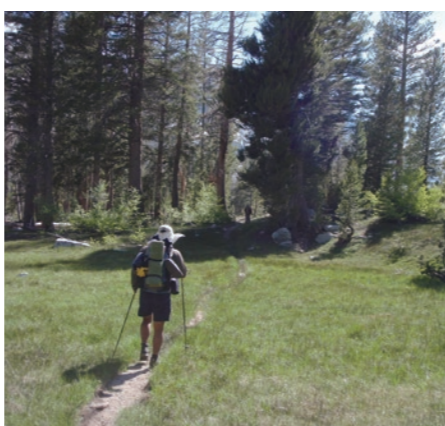
※トレイルを複数の区間に区切って歩くこと

ロングトレイルは自然体験の入り口。 アメリカと日本の国立公園の違い

私が初めてロングトレイルを歩いたのは2010年、アメリカ3大トレイルの一つ、西部を縦貫する約4260キロメートルのパシフィック・クレスト・トレイルでした。最初は冒険心から、挑戦したいという気持ちがあったかもしれませんが。ルートにはアメリカのナショナルパーク、つまり国立公園も含まれます。アメリカのトレイル関係者は「ロングトレイルは自然体験の入り口である」とよく口にします。今ある自然の大切さや、人間社会と自然との関係性を、歩きながら学んでいきます。だから、自然が守られている国立公園とトレイルは切り離せない関係性なんです。アメリカが100年近くかけて築いてきたハイキング文化を肌で感じて帰ってきて、「これを日本でできないかな」と思ったのが今の活動の原点です。

アメリカと日本の国立公園は、制度が根本的に違うんです。アメリカはどちらかというと、原生自然を守るためのもの。国が主に国有地として土地を管理し、保護する側面が強いです。一方で日本の国立公園は、人が暮らしている場所や私有地も含んでいるのが特徴です。

アメリカのロングトレイルは距離が長く、無人地帯も多いので、土の道を歩く距離が圧倒的に長いのですが、日本のトレイルは舗装率が高く、みちのく潮風トレイルでは7割以上にもなります。「それでアメリカのような自然体験の入り口になるのか」という問いは、ずっと頭の中にありました。でも実際にみちのく潮風トレイルを歩いてみると、想像以上にずっと自然を感じられて楽しかったです。「道が舗装されていても、こういう感覚で歩ける場所が、日本にあるんだ」と……。そして自然と合わせて、人の営みのなかを歩くというのがなんともおもしろい。それぞれの土地にある風光明媚な景色も素晴らしいのですが、ハイカーたちが後で思い返すのは、町で会った人との触れ合いや、ハイカー同士の会話だったりします。みちのく潮風トレイルは人の営みのなかを通過していくので、人と出会う機会が多く、自然環境とともに生き、その自然を守ってきた人たちとの交流を通して、受け継ぐべきものもおのずと見えてきます。特に三陸沿岸は、人と自然の結び付きがすごく強いと感じます。



アメリカのトレイルを歩く長谷川さん



碓石海岸遊歩道の松林を進む



アメリカのロングトレイルでハイカーと交流する長谷川さん(右)

長距離だからこそその計画が立てられないおもしろさ

ロングトレイルは、距離の長さが大事だと考えています。たとえば全部で100キロメートルほど歩く場合、1日最低でも20キロメートルは進めると考えると、5日間で歩きなかつたとしても、5日分の食料を背負い天気さえ悪くなければ、それは想定内の「旅行」と近いものになります。でも、みちのく潮風トレイルを通して歩く1ヶ月以上の旅は、どんなに計画を立てたとしても、その間に絶対なにかが起る。思い通りにいかない現実に向き合うなかで、人は成長し、心が動き出すのです。

これまで日本には私がアメリカで受けたようなハイキングカルチャーを感じる長距離トカった。その、ものすごく原始的な行為が人間に作用することが絶対あると思う。僕は、歩くことは「喜び」だと思っています。学術的にも歩くことは、心の健康にも良いみたいです。ちょっと辛いな、アイデアが浮かばないなっていうときに、歩くだけで頭がすっきりするし、ふっとアイデアが浮かんでくることがある。今は「歩ける都市」が注目されていたり、世界中のIT業界の人たちも歩くことに注目していたりします。

歩くことのもう一つの意義は「一番濃い情報を得られる速度」であることだと思えます。私はもともと旅が好きで、人力で移動したいと思って、自転車で日本を旅していました。自転車の旅はすごく楽しいけれども、「点」の感覚が増してくる。ある地点からある地点まで行くとして、その間はただの移動になります。それが車だったり、電車だったり、飛行機だったりして、移動できる速度や範囲が広がると、さらに点をつなぐように移動する



「歩くこと」で車や電車の速度では見えない地形・人の営み・地域の違いを体感できるという

レイルがありませんでした。環境省では各地に合計で約2万8000キロメートルの長距離自然歩道を策定していますが、そのほとんどはトレイルとしてきちんと管理されている状態ではなく、唯一機能しているといえるのが、このみちのく潮風トレイルです。復興国立公園という背景もあり、失敗させられないという思いもあつたんじゃないでしょうか。環境省、4県29市町村の自治体、地域の住民や関わったすべての人たちの力を合わせて、この道をつないできました。そしてMTCが立ち上がったことで、各地域の人たちとみちのく潮風トレイルを整備し、育てていく体制もできました。道が一本につながっているという安心感があり、歩くための情報も手に入るようになって、ようやくハイカーは歩き出せるんです。

日本でのハイキングやトレイルの文化は今まさに育ちつつある

日本でのハイキングカルチャーについては、「始まっている」と言いたいところですが、カルチャー、つまり文化として定着していく段階ではないかと考えています。「文明」と「文化」の違いについて、あるハイカーと話したことがあります。「文明」とは、わかりやすく言うと電気やチェーン店のように、どこに行っても同じサービスが享受できるもの。しかし、「文化」は地域性と密接に関わっていて、

のを感じます。乗り物の旅で訪れても、その地域の理解は進みます。けれど実際に長距離を歩くと、そこまで辿った土地の起伏や、匂いまで直に感じます。「こんなに僕はたくさんのことを見落としていたんだな」と気付くんです。訪問した先で少し歩くだけでも、その地域への理解が広がると思います。たとえば、海との距離と言っても、実は横の距離だけじゃなくて、縦の距離もある。三陸では海がすぐ目の前にあるのに断崖の上から見下ろすような場所も多く、高低差を強く感じます。そこにまた人の営みがあることで、この土地の気候風土だから、今こうして生きているんだろうかと気付かされ、その土地を深く知ることにつながるのではないかと考えています。歩く速度は、日本という国の、地球の、今が一番感じられる速度です。それを知らないことはすごく怖いことだと思います。

僕は東京生まれ東京育ちの江戸っ子なのですが、都会はコンクリートジャングルだから、守られていて、なかなか壊れない。都会ではちょっとした天候の変化に気付きにくいし、人の営みと自然環境が直結しないので、「人間だけで、社会や町を形成して生きている」と勘違いしてしまう。でも地球はそんな生易しいものではなく、突然牙をむく存在だと思えます。自然のなかで生活し、歩く速度でそれを体験していくことは、この地球にいる僕たちがこれからどう生きていったらいいのか、考えさせてくれるきっかけになるはず。

そこに行かないと体験できないものです。そういう意味で日本はまだ、外の事例を見習いながら進んでいるところ。これが日本だけのハイキング「文化」になるにはもう少し時間がかかりそうです。でも一歩ずつ進んでいければ良いと思います。

私たちハイカーは、地域の人たちの後押しがあつてこそ、歩きつづけることができるのです。アメリカにはハイカーのサポートをしてくれる「トレイルエンジェル」と呼ばれる人たちがいます。たとえばハイカーが町から遠い場所において、補給などに困ることがあります。そんなとき、トレイルエンジェルがわざわざ車で迎えに行き、町まで送ってくれます。彼らがいなければ、ハイカーは長い旅を続けていくことがさらに困難になってしまうんです。私たちは町の人には「ただの通りすがりの人」でしかないわけですが、「トレイル」が介在してはじめて、町の人に「ハイカー」という存在の認識が生まれます。

みちのく潮風トレイルが開通してからの6年の間に、「ハイカーが来てくれるなら協力したい」という方が増えました。自治体の方たちも「もつとハイカーが歩きやすくなるにはどうしたら良いの?」とか、「うちの町にハイカーが来ても泊まるところがないから、キャンプできる場所を用意したら喜んでくれるかな」と、いろんな取り組みをしてきている。もちろん、ハイカー同士の交流も生まれています。僕は「ハイカー仲間」と言いますが、ほとんどが初めて会う人です。でも、



「トレイルマジック」への道を示す看板。トレイル上で起きる、まるでマジックのような出会いや支援をトレイルマジックと呼ぶ。たとえば、飲食物がクーラーボックスなどに入れて置いてあったり登山口付近で食事の振る舞いなどが行われたりする

ロングトレイルを歩くことを目標にして訪れている人同士って、それだけでもう仲間なんです。1人で歩いていて「もう無理、辛い」というときに、たまたま居合わせたほかのハイカーが「どうした?ここでちょっと休んでいこうぜ」って声をかけてくれるだけでも、前に進む力が湧いてくる。僕がアメリカで感じた、「こういうことが日本のトレイルでもあつたら良いな」ということが、今みちのく潮風トレイルのあちこちで起きはじめています。

歩く速度だからこそ見える景色。国そのものを知るといこと

こういう仕事をしていると、歩く意義について聞かれることがあります。「歩く」ってすごく原始的な行動ですよ。車がない時代には、人は陸地を歩くことでしか移動できな

碓石岬から、太平洋を望む



聞き書き
柳沢卓美さん

文人墨客にも愛された 種差海岸の自然と歴史を語り継ぐ



三陸復興国立公園の最北にある、青森県の種差海岸エリア。ゴツゴツした黒い岩礁に、一面に緑が広がる天然芝、鳴き砂の砂浜、樹齢100年を超えると言われる松林と、変化に富む海岸は、国の名勝にも指定されています。その種差で商店を営みながら、30年以上、種差観光協会で活動しているのは、柳沢卓美さん。この地で生まれ育った柳沢さんは、種差を愛した文人墨客にも造詣が深く、地域の歴史を語りながら、次の世代へ引き継ごうとしています。

やなぎさわ・たくみ / 1948年、青森県八戸市生まれ。三陸復興国立公園内の種差海岸で暮らしている。親の代から続く食料品店「柳沢商店」を1990年ごろに継承。種差観光協会では30年以上活動を続け、現在は会長として、地域の景観維持や、観光振興、ガイドなどを担っている。吉田初郎や東山魁夷、佐藤春夫などの文人・画家と種差との関わりにも詳しく、地域の歴史的価値を語り継ぐ、語り部的存在。

水際まで天然芝が広がる 風光明媚な種差海岸

この種差という地域は、もともとは馬の放牧地だったところ。そこに人が住むようになって、畑を作ったり、家を建てたり、木を植えたり。最後まで芝生が残ったのがこの種差天然芝生地。馬を飼っている人たちが、仕事で使わないときに馬を連れて来て、伸びてきた雑草を食べさせ、芝生踏みをして、肥料を与えて強い芝生を育てていたんだね。こんなふうに水際のギリギリまで芝生が広がっている様子は、ほかではなかなか見られない風景だと言われます。



天然芝が続く種差海岸

からの臨時列車も出ていて、直通で来たわけ。観光客が多いことの例えとしてよく言われるのは、「駅からお客さんが歩いてきて芝生まで着いても、まだ駅から人が降りてきてる」って。それくらい、たくさんの方が訪れた。今だったらなんでも車に積んで来るけど、その時代は電車やバスだったから、ここでいろいろ調達していたんです。だから商売をやっている人も多かった。向こうにお土産センターがあって、ビーチボールとかサンダルとかも売っていて、写真屋さんたちも来ていました。そういう種差を見て過ごした幼少期でしたね。



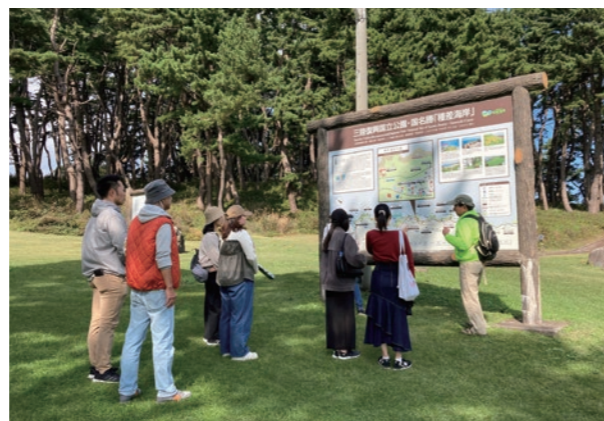
昭和30年ごろの種差海岸には馬が放牧されていた

県立公園から国立公園へ。 三陸を巡るツアーも

「三陸復興国立公園」という名前ですけど、震災があったから国立公園になったんじゃない、その前から沿岸の市町村で話し合いをしていたの。岩手県が最初に指定されたから、「陸中海岸国立公園」になった。それから、南は気仙沼のある「陸前」まで広がって、それで種差のある「陸奥」の国が入ると三陸になる。陸奥、陸中、陸前、この3ヶ所を合わせて「三陸」という名前なんです。

種差海岸は国立公園になる前から、県立自然公園であり、国指定の名勝でもありました。行政というのは縦割りだったから、それぞれ立場が違ったんです。でも今は、国や市などの行政や地元と一緒に話し合っ

て、同じ方向を向けるようになりました。国立公園になったことで、「種差海岸インフォメーションセンター」が整備されたし、三陸を巡るツアーとか、北東北にあるほかの国立公園や自然遺産とセットになったツアーも増えてきている。ほとんどは宮古や十和田のほうから来て、最後は八戸駅から新幹線で帰るとか。盛岡からバスで陸中海岸に行くと、こちへ上って来て、八戸駅から新幹線で帰るとか。みちのく潮風トレイルができてからは歩くツアーも増えてきているから、1日目はここを歩いて、2日目に奥入瀬渓流を歩いて、3日目は白神山



旅行者をガイドする柳沢さん（右）

地に行くと、みたいな、ほかの地域と連携する機会も増えています。

国立公園というのは、県立自然公園よりネームバリューがあるから。海外からも旅行者が増えていて、お客さんの層が広がってきてますね。それでもまだまだお客さんに言われるのが、「なんでもっと宣伝しないんだよ」ということ。まだそんなに知られていないんですね。国立公園としては、たとえば十和田とか宮古の観光地は、多くの人が知っていても、ここはあんまりまだ知られていない面があって。先日も東京からの団体のお客さんと歩いたんだけど、最後に種差へ来て、「ここが一番良かった」なんて言ってくれています。



種差海岸には650種を超える植物が自生し、季節によって多彩な花々が咲き誇る
(写真右上から時計回りにハチノハトウヒレン、ハマナス、フクジュソウ、ハマギク)

芝生の上で深呼吸一つして リフレッシュする人も

種差という場所には、いろんな顔があります。芝生があったり、砂浜があったり、松林があったり、岩場があったり。そういうところに、植物が自分の居場所を見つけて、砂浜にも岩の上にも花が咲いている。歩いていくと、どんどん景色も植物も変わってくるから飽きないんです。

ガイドの依頼があるときには私も一緒に歩いて案内します。たとえば、ここから葦毛崎展望台まで、ただ歩くのであれば2

時間くらいだけど、いろんなところを3時間くらいかけて案内する。途中で草花だったり、種差にゆかりのある人だったり、地元産物のことなんかを話しながら、季節によって草花が違ってくるから、「あそこには今あの花が咲いているな」っていうのを覚えておく。その季節で最も美しいところを見たいから、「今日はなにを見せようか」と、歩くコースを考えるんです。ここには植物が好きなのも来るし、健康のために歩く人も来る。芝生に大の字に寝転がっている人もいれば、車から一歩降りて、芝生の上で深呼吸一つしてリフレッシュして帰る人もいます。

文人墨客が愛した種差で 絵や小説や詩が生まれた

そういう場所だから昔からいろんな人が来て、絵を描いたり、小説を書いたり、詩を書いたり、いろんな作品を残している。そういう人の痕跡を訪ねてくる人もいます。

この特徴っていうのは、開放的な明るさ。日本の観光地っていうのは、溪流とか渓谷とか、奥まった場所にあるところが多いんだけど、ここは広い芝生と海だから、ここに来た人の多くが、「日本離れしてる」って言う。吉田初三郎(※1)という人は、全国の観光地を巡った上で、「種差は日本の海岸だ」と言ってここにアトリエを構えた。「フランスのブルターニュより良い」つ

ていう人もいるし、「カナダ辺りを歩いているようだ」っていう感想を持った人もいます。国内だけじゃなく、海外を知っている人たちが、「種差は良いところだ」って言っているのが、ものすごく重みがありますよね。司馬遼太郎(※2)に至っては、「どこかの天体から人がきて地球の美しさを教えてやらねばならないはめになったとき、一番にこの種差海岸に案内してやろうとおもったたりした」と言っている。そういうことを話しながら、種差を案内するんです。

東山魁夷(※3)の代表作の『道』を知っている人は多いから「ここでスケッチしたんだよ」と、その場所を案内する。松林の遊歩道を歩いているときには、種差小学校の校歌を作ってくれた詩人の佐藤春夫(※4)の話をする。松林のなかに仙人窟っていう洞窟があるんだけど、そこにはかつて老人が住んでいたの。戦後、佐藤春夫はそのことを紹介した新聞記事を見て、「私も冬は無理だけど、春から夏の終わりまでだったらあそこに住んでみたい」と。彼は、詩人の草野心平(※5)や、彫刻家の高村光太郎(※6)と仲が良くして。十和田湖畔休屋の御前ヶ浜に建つ高村光太郎の代表作『乙女の像』の除幕式の後、佐藤春夫は種差小学校へ行き、校長らとこの辺りを歩き、草野心平は、地元の詩人たちと一緒に、ここから蕪島の辺りまでずっと歩いたの。そのときの様子を『種差海岸』という詩に残しています。ほかに、八戸出身の芥川賞受賞作

家の三浦哲郎(※7)の話だったり、その師であり、種差を訪れたときのことを紀行文に残した井伏鱒一(※8)の話をしたり。今では種差に関わりのある作品を残している、文人・芸術家の作品を収集するのが私のライフワークとなっています。

「日の出」だけじゃなく 「月の出」も美しい

種差に朝日を見に来る人たちは結構います。でも、月も毎日、海から昇っていることにはほとんどの人は気が付いていません。満月のときは大きくて赤い月が出るの。詩人の草野心平が「ザボンのやうな満月」と表現した月が、種差で見られるんです。だから朝、日の出を撮りに来た人に「夕方もう一回来てみて」と言う。「なんかあるの?」「これより良いのが見られるから」って。そうすると、ほ

とんどの人がびっくりする。私は10年以上前から、満月に合わせて月見の会をやっているんだけど、そのときは赤くて大きい「月の出」を見るの。それが薄れてくると、今度は海に反射して月の道ができる。場所を移動して砂浜に行くと、自分の足元まで月の道ができるんです。立つ場所をずらしても、ちゃんと自分の前に月の道ができる。「銀色の道」とか、「銀色の波」とか、そういう歌もあるけど、それは月明かりの道を歩くことを言います。「金色の波」は太陽の光のことなんだ。

天然の芝生を守り、次の世代へ 引き継ぐということ

私は観光協会の会長として、この景観を残すのが一番の仕事だと思っています。芝生って、自然の景色のように思う人もいるけれど、人間の手を入れることで保てる景色なんです。芝刈りをしなきゃいけないし、それだけじゃない。たとえば松の木があると、そこには松葉とか松ぼっくりとかが落ちて、油があって腐らないから日が通らなくなり、その下にある芝生は退化してしまう。冬はモグラが土を盛り上げて、氷点下になるとカチカチに凍っちゃう。春になってそのままにしておくと芝生の上に土が盛り上がって、いろんな種が飛んできて、雑草ばかりになる。だから春先に松葉を除去したり、盛り上がった土を整えたり。そういう作業をするときは、環境省や市役所からも手伝いに来てくれるし、

ここでグラウンドゴルフをやる人たちも手伝ってくれたりして。みんなで守りながら、芝生を使っています。理想は、子供がはだしで走り回れるようになることです。

今はほとんど子供が少なくなつて、廃校になる学校もあります。だから、若い人たちがここで生活できるように、地域でもっと商売が生まれるようにしたい。今、市にお願いしているのは、「新潮観荘」の建設。大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師の吉田初三郎が「潮観荘」というアトリエを構えたので、その跡地を再生したいんです。今はインフォメーションセンターに来て、芝生に降りてそのまま帰っちゃうから、新潮観荘からインフォメーションセンターまで回遊性を持たせて、この通りにしゃれた喫茶店ができたなら、お土産屋さんができたりしたら……。人と自然が寄り添い、生活のできる場所として、次の世代の人たちへ引き継ぎたいです。



吉田初三郎のアトリエ 潮観荘の模型

種差海岸では月見鑑賞会が定期的に開かれ、多くの人たちを魅了している



漁の道具が保管される、上村さんの番屋にて

子供の頃から親に連れられてこの浜に降りて漁の手伝いをしたり、夏になったら海水浴をしたり、秋になると魚を釣って遊んだりね。生まれたときからそういう生活をしてきたから、海からはもうなんとなく離れられないというかね。海が好きなんですから、20歳ぐらいから、机浜^{つくし}で仕事をしております。頑張れば頑張るほどお金になるから面白いんですね、やりがいがある。たとえばアワビとか、いっぱいあれば思いがけない収入になりますのでね。同年代の人たちと張り合ってきたりしてきました。

そこにある番屋は父親の代からあって、ウニやアワビをとる道具とかをいろいろ保管しておくわけ。トタンとか木の皮を剥いだりして、不要になった材料を自分たちで浜に下げている、いろいろ工夫して番屋を作っている。私の家はここから車で2〜3分だけど、ほか

生まれたときから、この海と暮らしてきた

平成12年の8月から「北山崎サッパ船アドベンチャーズ」として漁師仲間8人と連航をはじめたんですけど、参考例がないので料金設定の相場もわからなければ、今のようにPRもできなくて大変でした。ホテルを窓口に



切り立つ岩壁の狭間に、静かに息づく机浜

の漁師たちの集落は浜から離れたところにあるから、夜遅くまでこの小屋で作業しながら寝泊まりをして、朝早くに沖に出て行く人もいて。春はワカメ、夏はウニ、秋はコンブ。そして11月からはアワビ。そのほかにもいろいろと海藻類とかもとれるんですよ。もう一年中ずつとなかいら、楽しみがいっぱいあります。

職人気質の漁師が観光ガイド 最初は自信を持ってなかったけど

サッパ船クルーズはね、今年で25年になるんだけど、最初はあんまり乗り気ではありませんでしたね。当時は北山崎まで行く遊覧船もあったし、漁師は魚をとるのが仕事ですから、接客できるかどうか、そこが一番ネックでした。そのときの村長が「これからの観光、サッパ船はやるぞ！ やらないか」ってね。結構な数の観光客が来ても、机浜の港の景観を見ただけで満足して、北山崎や断崖絶壁を見ずに帰ってしまうような状況が何年も続いたものから、サッパ船で観光の裾野を広げようって。村長が親戚だったのもあって断りきれなくて「じゃあやりましょう」と動いたのが始まりでした。

してやっただんですけど、初めの頃はお客さんが少なかったです。本業の傍らクルーズだったもんですから、何人か辞めた方もいて。村長の手前、私は辞めるわけにはいかないから、いずれも頑張った。

サッパ船でのガイドはね、人前で話すのがなかなかうまくいかなかった。私だけでなく仲間もそうだったんですよ。何年か経つうちに、行政の方々の力を借りてよその観光施設へ視察に行ったり、勉強会もやったりしてポイントをつかんでね。船のほうの操縦はもうプロですからね、喋りのほうが大変でした。船長があまり話してもダメなんです。お客さんからなにか聞かれたとき、ちゃんと説明ができないとこれもダメなんだよね。やっぱりこう、笑顔をね、笑いをね。

たとえ青の洞窟、あそこは非常に水がきれいで、エメラルドグリーンになるんですよ。地元の漁師たちはこの洞窟を「つばめ穴」と呼んでいたんですね。あるときお客さんが「い

「亀の親子に似ていませんか」って。そうすると「あ、本当だ」って喜んでくれて。「この洞窟にはこのように親子の亀が住んでおって、この洞窟の中にラッキーにも入れたお客さんは、健康で長生きができて願いが叶いますよ」って、こう言うんです。そうするとお客さんはね、手をパンパンと叩いて拝みます。実はこれもお客さんが見つけたんです。「あれ亀に似てる」って言うから。ほかにも横顔がゴリラに似ている岩なんかもあってね。

聞き書き
上村繁幸さん

**いつもの仕事を漁船でクルーズ
海の美しさと脅威を伝えていく**



田野畑村の方言で、漁師のことをハンモウド（浜の人）と呼びます。地元のハンモウドたち5人が、自身の小型漁船（以下、サッパ船）に観光客を乗せて、三陸復興国立公園を代表する北山崎まで回遊する体験型プログラムが人気を博しています。立ち上げメンバーの上村繁幸さんは当初、うまく接客できる自信も、この場所に対する特別な思いもなかったといいます。それでも、海の美しさと脅威をサッパ船の上から伝えつづける上村さんにその思いを伺いました。

かみむら・しげゆき / 1950年、岩手県下閉伊郡田野畑村机地区生まれ。親戚であった当時の村長の強い勧めにより、自身のサッパ船を使った断崖クルーズを2000年から開始。以来、漁師とNPO法人体験村・たのはたネットワークの1人としてサッパ船クルーズを掛け持つ生活を続けている。口下手だと自認するが、勉強会やお客さんとのやり取りを通して楽しませるコツを研究し、観光客を楽しませることをモットーにガイドを務めている。

ガイドで使用しているパネルを持ち、説明する上村さん



や、イタリアの青の洞窟よりいいな」と言っていたわけだ。私は知りませんでしたので、お客さんの視線が岩に向いている間に、手帳に忘れないように「イタリアの青の洞窟」とメモをして。

その洞窟を抜けると岩があつて、その上に親子の亀に似た岩があるんです。私はね、主に年配の方にこんなふうには言うんです。「そこを見てなにかの動物に似ておりませんか」「亀の親子に似ていませんか」って。そうすると「あ、本当だ」って喜んでくれて。「この洞窟にはこのように親子の亀が住んでおって、この洞窟の中にラッキーにも入れたお客さんは、健康で長生きができて願いが叶いますよ」って、こう言うんです。そうするとお客さんはね、手をパンパンと叩いて拝みます。実はこれもお客さんが見つけたんです。「あれ亀に似てる」って言うから。ほかにも横顔がゴリラに似ている岩なんかもあつてね。

子供の頃からここにいるから、どんな岩があるかはだいたいわかるんですが、自分では「なにかに似ている」なんて思ったことが今までなくて。サツパ船に乗ったお客さんから教えてもらって初めて、確かにそう見えるなって思っ、あとからスタッフを連れて行って写真を撮らせてパネルにするわけです。こうやってお客さんの発見やコミュニケーションの延長線上で生まれた言葉をガイドに取り入れてきました。

印象的だったのは「日本にまだこんな景観があったのか」というお客さんの反応、それにはびくりしましたね。当時は1人3000円ぐらいの料金でしたけど「船長、絶対安売りしちゃダメですよ」と。そんな話



8キロメートルにもわたり高さ約200メートルの断崖絶壁が続く北山崎

を聞くと、元気が湧いてくるんですよ。自分たちにとっては仕事をしている場所だからなにも感じていなかったんですけど、よそから初めて来た人たちがクルーズの最中に見たものの印象がすごいな、と気が付いてね。こんな田舎に何時間もかけて来てもらって、その中でも満足して帰ってもらえるということにワクワクしてね。

それまでは北山崎や鶴の巣断崖に行っても「なるほどな」と思う程度だったんです。展望台から眺めればきれいだなというくらいにしか思ってなくて。だってここは、漁師にとって自分たちの仕事場でしたから。クルーズを始めたことで、お客さんの反応や声を受けて「この景色が宝に恵まれているんだな」と思



漁業用とクルーズ用でもある、上村さんのサツパ船

うようになり、だんだんと自信を持ちはじめました。お客さんの数も伸びてきて、サツパ船の船長をやってみたいという漁師も増えたんです。

すべてを奪われた浜に残った絶景 希望と再出発の帆を上げ、4ヶ月で

そうしてサツパ船クルーズは、田野畑村の人気コンテンツとして盛り上がり、村長や観光関係の行政職員も、手応えをつかんだと思うんですよ。でも、東日本震災があった津波を受けてなにもなくなったもんですから……。私は漁の道具だけでなく船も2隻なくして、そして番屋もなくなりました。漁のことも考えましたけど「私はサツパ船をやるんだ。再開するんだ」とね。復興のために全国のみなさんからいろいろと援助を受けたり、助けってもらったりして、そしてこのサツパ船に乗った人たちもテレビ越しで私たちを見ていると思うと力が湧いてきて、元気が頑張っている姿を見せたいという一心で、再開に向けて船を探すことにしました。

もう1つ希望になったのは、あれだけの被害があったのに、北山崎が形を変えず、今まで通りであったことでした。流されずに残った仲間の船に便乗して、漁師たちと見に行つたことがあって、そうしたら絶景がそのまま残っていて、みんな「よし、頑張るぞ」と感動して帰ってきた。そんなことがありました。

ちょうど震災の2ヶ月前に、青森県の東通村の行政の方々と岩屋漁協の組合長さんたち10人ぐらいが、私が所属するNPO法人体験村・たのはたネットワークの視察へ田野畑まで来ていたんです。そのつながりを思い出して、船を探すのに協力してもらいたいと組合長へ連絡をしたんです。

メンバーの8人のうち、2人の船は助かったけど、私を含め6人の船が流されてしまった。みんなの船も見つけてこようということで、地元の漁協にも支援してもらって、当時の体験村・たのはたの副理事長をしていた佐藤さんと一緒に、4月1日に中古船を探しに青森まで行きました。6隻、目処を立てて写真を撮ってきて仲間たちに見せると「よく

やったぞ！」「欲しい！」「喜んでくれてね。それからみんなで船を見に、青森には3〜4回通いましたね。そうして、2011年の7月29日にサツパ船クルーズが再開しました。震災前は地元漁師たちが番屋群をガイドする「番屋エコツーリズム」というツアーもあったんですが、津波ですべて流されてしまった。でも、震災前に大学の先生たちと地元の青年会を中心に、地元の宝を探す「地元学」という取り組みがあって、番屋の柱や梁がなっていて、再生プロジェクトとして当時の面影を残した形の番屋群を2014年に再建してくれました。机浜にかつての風景が戻ってきました。



番屋群再生に向けた取り組み。井戸の復旧作業の様子

漁師が伝える、 自然の力と机浜の魅力



震災後のサツパ船クルーズでは、波の静かなところに船をつけてから、お客さんに必ずこう聞きます。「津波の話をしてよろしいですか？」と。お客さんによつては怖くてダメだとか、いろいろあると思うのでね。でも、「ぜひ聞きたいです」と大半の方が言ってくれるんです。そこで津波の高さ、そして自分が実際に見た津波の話をするんですよ。「みなさんがテレビで見た津波は真つ黒い波でした。でも私が高台から見た波は青くてきれいな色をしていました」と。そうすると「どうですか」って。

陸地に近い内湾や河川があるところはね、

机浜を訪れてくれたお客さんと震災後、手を差し伸べてくれた方々の存在、甚大な災害を乗り越えた北山崎の力強さが、自分たちの原動力になったという



へドロが溜まりやすいから真つ黒い津波になつたんですよ。ここは陸から遠く離れた海で砂地はなく、あるのは岩礁ですから、水がきれいなんです。こうやって自分が見た自然の脅威も交えてお客さんに話すと「船長さん、良かった。津波の話も聞きやすかった」とか「今度は近所の人を連れてくる」「孫を連れてくる」ってね。実際にね、2度3度のリピーターの方もいるんですよ。それが嬉しいですね。サツパ船クルーズはね、普段漁師が乗っている小型の船を使っているわけだ。魚をとるのもいいんですけど、やっぱり田野畑村の観光の一つとして、後を継いでくれる人がいてくれたらいいなと思っています。お客さんへのガイドがあるからね、喋りが苦手なんですって人も少なくないけど、みんな最初はそ

うだからまずやってみようって仲間をつないできました。自分のペースでいいっていうか、ここは私の庭ですとか、作業場ですっていうように、自分が普段ここで働いて生活していることを素直に話せば、お客さんはそれを楽しんでくれる。ここは植物みたいに種や苗を植えずとも、天然のものがたくさんとれる。だから私はよく「ここは太平洋銀行だ」って言って笑わせて。難しく考えなくていいんです、本当はね。この景観に対してもしっかりと、お客さんの感動している表情や喜んでる姿を見ると、ここを誇らしく思えるようになった。宝に恵まれているんだなと思っ



2016年、机浜番屋群は、水産庁が発表する「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産100選」に選ばれた

聞き書き
階ケイティさん

三陸海岸の復興の道のりを 歩きながら伝える外国人ガイド



日本好きが高じて移住した、オーストラリア出身の階ケイティさん。現在は、外国人観光客向けのツアーガイドや商品開発、震災学習のコーディネーターなどを行っています。コロナ禍以降、外国人観光客の間でも人気が高まっているのが、みちのく潮風トレイルのツアー。このトレイルのルートには、東日本大震災で被災した沿岸地域を多く含みます。被災地をガイドするときにケイティさんが大切にしていること、そして彼女がここに住みつづける理由とは？

しな・ケイティ / 1984年、オーストラリア・ブリスベン生まれ。日本の文化や伝統芸能に興味を持ち、留学を経験した後に北海道で就職。2012年に北海道から岩手へ移住。岩手各地におもしろい文化や芸能がたくさんあるにもかかわらず、外国人観光客に知られていない現状をなんとかしたいという思いで、合同会社THREE GOATSを仲間と立ち上げ、外国人目線での商品開発、セールス活動と現地の英語対応を担当している。

日本の文化に興味を持ち、オーストラリアから移住

私は外国人観光客向けに、みちのく潮風トレイルのツアーガイドをしています。トレイルのルートにも入っているこの浄土ヶ浜は、私にとって「日本にこんなきれいな海があるんだ！」という驚きの場所でした。このビーチは夏になると海水浴場としても開放されるので、泳いだり、カヤックをしたり、大好きな海遊びができる場所でもあります。

「浄土ヶ浜」という地名は、昔ここに来たお坊さんが「さながら極楽浄土のごとし」と話したことに由来するそうです。この真っ白な浜ときれいな海を見て、極楽をイメージしたんですね。外国人観光客に説明するときは「極楽浄土」に当てはまる英語がないので「Paradise」とか「heaven」とか、

「天国」のようなニュアンスで表現します。日本語って難しいですね(笑)。

私はオーストラリアのブリスベン出身で、子供の頃はスカートのまま木に登ったり、海で泳ぐのが大好きだったりと、ちよつとやんちゃな女の子でした。ブリスベンは観光地のゴールドコーストから近いので日本からの観光客が多く、小学生の頃から日本語を学ぶ授業があったんです。日本の郷土芸能に触れたり、着物を着たりするうちに、日本に興味を持ち、初めて来日したのは17歳のとき。千葉県柏市にある高校へ1年間留学しました。オーストラリアに戻ってからも大学で日本語と観光業を勉強し、在学中には北海道のホテルでインターンシップを経験しました。卒業後は日本へ移住し、そのホテルに就職。岩手へは、縁があつてやってきました。

震災の翌年に 岩手へ引越

岩手に引越してきたのは、ちょうど震災の翌年でした。オーストラリアにいる家族からはすごく反対されましたね。向こうでも、福島での原発事故や、津波のニュースが放送されていたので、心配されたんです。

こちに引越す前は、ほとんど岩手の内陸にしか行ったことがなくて、唯一沿岸で訪れたのが浄土ヶ浜でした。ここを見て、すごくきれいなあつて思ったんです。本州の日本海側には行ったことがあつたのですが、そ

のときは、黒い岩場や濃い色の海で暗いイメージがあり、「オーストラリアとは海の色が違うんだな」と思っていました。でも、太平洋に面したこのビーチは、浜辺が真っ白で、青々として透き通った海がある。いろんな人に見てもらいたい気持ちがあります。たくさんの方が来てしまうと、自然が崩れちゃったり、悪くなっちゃったりする可能性がある。だから国立公園になって整備され、自然が守られるのは良いことだと思います。

トレイルがあるからこそ 訪れた小さな町

ツアーガイドの仕事を選んだのは、オーストラリアの大学に在学中、日本人向けの現地ガイドのアルバイトをしていた経験から。北海道のホテルで働いていたときよりも、もっと人と話ができる仕事をしたかと思つて転職先を選びました。会社は盛岡にあります。ガイドをするのは日本全国のあらゆる場所でした。ニーズが多かったエリアは北海道、東京、京都。ただ、大きな都市部に行く、すごく混んでいて、自分はそのあたり得意じゃないことがわかってきました。

コロナ禍の県外に出られない期間をきっかけに、岩手の自然をいろいろ知ることができました。2019年にみちのく潮風トレイルが開通していたので、せっかくだし行ってみたいなかなと思つて歩きはじめたらハマったんです。もともと海が近いところで育つたので、



浄土ヶ浜の白い奇岩は火山岩の一種、流紋岩からできている。波や風雨で侵食され割れ落ちた岩のかけらが堆積し、白い小石浜が作られた

よく海のスーツはやっていて、アウトドアは好きだったんですけど、「歩くこと自体の楽しさ」を知りました。それで、都会を案内するよりも、自然のなかをガイドするのも良いなと思うようになったんです。

それまでは行かなかったような場所にも、みちのく潮風トレイルができたからこそ足を運べたし、小さな町の雰囲気それぞれ違うこともわかりました。トレイルってただ歩くだけだと思われられるかもしれませんが、歩くことによって地元の方と出会って、その人たちの強さをすごく感じられるんですよ。歩き終わった後印象に残るのは、きれいな景色だけじゃなく、触れ合った人たちとのストーリーだったりします。トレイルがなかったら、海には来たかもしれないけれど、地元の人と接することはできなかったと思うので、あらためてトレイルができて良かったんです。



浄土ヶ浜の風景。白い小石浜と奇岩、青い海と空のコントラストに息をのむ



ガイドツアーの様子

大きな都市ではできない体験を 求める観光客が増えている

ガイドの仕事では、私の出身地であるオーストラリアをはじめ、ニュージーランドやアメリカ、北欧からの観光客が多いです。最近では、大きな都市ではできない体験に興味を持つ人が増えています。特にコロナ禍以降、混み合わないところを希望する方が多く、歩いたり、体を動かしたりするのが好きな人は、日本でのアウトドアにも興味を持っています。熊野古道や中山道のような有名なルートはもともと人気があったんですけど、みちのく潮風トレイルが新しく開通したことで、このエリアに興味を持つ方が増えました。ツアー用にベースのプランは作っているん

ですが、「地元の方とより多く触れ合いたい」とか「文化を学びたい」、「もっと歩きたい」「美しい自然が見たい」といったリクエストを受け、お客さんの好みに合わせてアレンジします。場合によっては、漁師のお父さんの船に乗って牡蠣養殖を学んだり、リラックスできるシーカヤックをやったりと、さまざまなアクティビティを提供しています。地元のお母さんたちとご飯を一緒に作りたいというリクエストも多くて、ワカメの芯抜きをやったり味噌汁を作ったり、陸前高田の辺りだと「がんばき」という蒸しパンみたいな郷土菓子があるので、それを一緒に作ったり。東京のような大きな都市で出るような料理じゃなくて、地元の方々が食べているものを一緒に作って食べるのが楽しいんですよ。

被災した土地を ガイドするということ

トレイルのルートになっている沿岸地域は、東日本大震災の被災地でもあります。海外からの観光客の多くはニュースで伝えられた情報しか知らず、この辺りが今どういう状況かわかりません。なので、歩くだけではなく、できるだけ地元の方と接する機会を作るようにしています。私は日本と海外の架け橋のような役割ができる嬉しいです。地元の方の負担にならないようにしつつ、地元にお金が落とせる仕組みを作りたい。また海外の方々に本物の日本生活を感じられるように提



東日本大震災により被災し、津波遺構として保存されている「たろう観光ホテル」について説明するケイティさん

日本のお母ちゃんや お父ちゃんがいる

オーストラリアにはだいたい年に1回帰るんですが、「日本に帰したくない!」と言って、毎回お母さんがバスポートを隠してしまします(笑)。それでもここに居つづける理由は、人がすごく優しいから。東北の沿岸地域には、日本の家族のように思っている人たちがいるんです。釜石の海沿いにある旅館「宝来館」の岩崎さんは、私の日本のお母ちゃんと思ってるぐらいの人。パワフルでかっこいいんです。お父ちゃんは何人かいるんですが、いろいろ教えてくれる漁師さんが多いですね。陸前高田にいる長洞元氣村の村上さんは、船に乗りながら陸前高田のいろんな話をしてくれる。現在の話もしてくれますが、震災の当時、その地域が津波によって孤立してしまったと

きの話、この地域での漁師さんの仕事や生活についても話してくれます。本当の家族じゃないけど、家族みたいな感じ。ここできた仲間がいるので、それがすごく心強いんです。最初は「こんな田舎によく来るね」なんて話しか方をされるんですけど、こちらが「震災当時のことを伝えたい」とか、「日本や東北のことを知ってもらいたい」といった話をすると、だんだん昔の話をしてくれたり、自慢の料理を作ってくれたりするんです。地元の方は、穴場スポットを結構知っているんですけど、「自分にとっては良いかもしれないけど、人におすすめするまでじゃないかな」つ



人の優しさ、温かさや強さ、そして三陸のきれいな海がケイティさんを魅了してやまない

て遠慮してしまうんですね。仲良くなってると、自分だけの特別な場所を教えてください。私もあります。そういう感じで、東北の人たちはわりとシャイなんですけど、時間が経つと、どんどん仲間になってくれる。それがすごく好き。そのフレンドリーさやおもてなしの雰囲気がおーストラリアの人と似ていると感じます。

日本語のなかでも、東北の沿岸地域には訛りがあるので、最初はやっぱり聞き取るのが難しかったです。一緒に働いている方が宮古出身で、少しずつ訛りを出しているのが慣れてきたんですけどね。でも地域のみなさんは、私に気を使って、だいたい頑張って標準語でしゃべってくれていると思う。お母ちゃん、お父ちゃん同士で話しているのを聞くと、まっ

たくわからないことがあります(笑)。

海外の人との交流で プライドを持てるようになったら

海外からの観光客の多くは、私と同じように「こんなにきれいな海が日本にあるなんて」という感想を持ちます。彼らの日本のイメージって大都市なので、そこから新幹線に乗ってすぐ来られる場所に、こんな大自然があることに驚くんなんです。昨日はこの辺りを海外からのお客さんと一緒に歩いたんですが、水が透明で、ウニちゃんも見れました。あ、ウニちゃんはウニのことです。かわいいから「ウニちゃん」って呼んでます(笑)。

今は盛岡に住んでいるんですけど、1時間ちよつとでこんなきれいな場所に来られるのはすごく嬉しい。私は海が大好きなので、きれいな海で遊べて、しかもおいしいものを食べられるのが大きな魅力です。それが住みづける理由の一つにもなっています。

もう一つは、このエリアは震災から復興して、地域の人の温かさと強さが感じられること。こつちまでパワーをもらえるんです。多くの方にこんなきれいなところがいっぱいあるのを知ってほしい。私は海外の方を東北にお連れして、もつと交流してもらえるようにしていきたいです。外部の人との交流によって、地元がすてきなところだつて見直すことができるようにもつともつと、東北にプライドを持てるようになると思うから。

宝来館の前でツアーのお客さんとの記念撮影の様子



聞き書き
千田勝治さん

失われた松原、再生に50年 憩いの場を取り戻すために



自然に逆らわず、 この地に根を張って

こっちに帰ってくる前は、高校の恩師の推薦で海苔の商社で営業をやっていました。あるとき仙台の職場に、沖に出かけた親父の姿が見つからないと連絡が入って。小友町の海岸線を何百人もの消防団の人たちが一生懸命捜索してくれたことを忘れることはないですね。私は長男なものですから、親父が亡くなったのを機に、勤め先にも理解して頂いて23歳で牡蠣養殖の道に入りました。

当時の一般的な養殖業は家族だけで切り盛りし、夜中の1時半に漁に出て日中も作業を続けるのが当たり前。人手不足を長

時間労働で補う気合いの仕事でした。もとも自分は早起きが得意じゃないし、サラリーマン時代の「8時出社、17時退社」から抜け切れなくて、思い切ってそのスタイルを導入してみたいんです。足りない部分は従業員を雇って、船の設備も少しずつ改善して、作業の効率を上げていった。

当時は「変わり者」と見られていたが、続けるうちに成果が出て、広田湾でも有数の養殖業者と呼ばれるようになりました。陽が昇ってから出勤するスタイルなのは、いまだにうちぐらいですね。そうした姿を見ていたからなのか、息子3人も帰ってきて後を継いでくれたので、私は好きなことをやってばかりです(笑)。

牡蠣の養殖ってというのは、波が落ち着いている湾で、ホタテの貝殻に牡蠣の稚貝をつけたロープを屏風のように海の中に沈めて育てているから、少しの波でも被害が大きくなるんですね。1時間で30センチメートルも泳いでしまったら、結構な被害が出るね。小友エリアは、特に津波の被害を受けやすいんですよ。沖から押し寄せた波がすぐその岬を回ることで、潮が速くなるんですよ。

東日本大震災のときもうちの船は4艘ダメになってね、被害額は相当だった。あのとき私は議会に出ていてスーツを着ていてね、家に帰ってジャージに着替えていたんですね。財産はそのジャージだけ。家の近くの高台で津波を真上から見たいけど、

その距離は10メートルもなかったですね。津波の影響はいろんなところへ及んでね。自然が相手の商売だから、どうにもならないです。でも息子たちがみんないるからね、大きな被害を受けても悲壮感がなくて、前向きな気持ちだったよね。

地域の大事な風景

23歳の頃に親父が亡くなったのが私の人生の中で奉仕精神が培われた出来事だったと思います。何百人という消防団が親父を捜索しているわけですよ。とんでもない迷惑をかけたという気持ちがあつて。ですから、消防団への誘いはもちろん受けて、30〜40年ぐらいですかね、副団長もやりました。ほかに広田湾の養殖業組合長や陸前高田市の市議会議員、震災時には各避難所の自治会にコンタクトを取って、連絡協会の立ち上げたりもして。高田松原を守る会の始まりでもある陸前高田ロータリークラブにも声をかけられて、25〜26歳の頃に入りました。

当時、市は、市内の会社だとか各地区単位で担当分けて、年に1回ぐらい高田松原の草刈り作業をしていたんですよ。その保全活動の一環として、ロータリークラブも関わっていたんですね。そのうち、持続的な保全活動の重要性を感じて、2006年にはロータリークラブ発祥で高田松原を守る会という組織を立ち上げました。

震災後(2011年3月29日)の高田松原の様子(いわて震災津波アーカイブ/提供者:岩手県沿岸広域振興局大船渡土木センター)



震災前(2010年3月10日)の高田松原の様子(いわて震災津波アーカイブ/提供者:岩手県沿岸広域振興局大船渡土木センター)



白い砂浜に青く生い茂る7万本の松で知られ、国の名勝でもある高田松原。長く地域に親しまれましたが、2011年、東日本大震災の津波により、1本の松を残して全てが失われました。千田勝治さんは、その再生を願うNPO法人高田松原を守る会の理事長として活動を行っています。仲間や行政と協力し植樹を重ねながら、地域の取り組みの中心となってきた千田さんは、復元に50年を要するとされる松原の未来を今、どのように見つめているのでしょうか。

ちだ・かつじ/1948年、岩手県陸前高田市小友(おとも)町生まれ。家業である牡蠣養殖業を継ぐため、23歳で海苔の商社を退職して宮城県からUターン。持ち前の利他の精神とリーダーシップを発揮し、広田湾養殖業組合長や、陸前高田市の市議会議員として地域に尽力してきた。現在はNPO法人高田松原を守る会の理事長として、松林の育成から植樹、保全活動までを担い、半世紀をかけた再生の道のりを力強く牽引している。



賑わいを見せるかつての高田松原海水浴場（いわて震災津波アーカイブ／提供者：陸前高田市観光物産協会）

高田松原を守る会に属してから、この場所について勉強したんですね。海岸線が松林を見かけることもありますが、陸前高田の松原は白砂青松で美しく高く評価されて、1940年に名勝指定された地域の貴重な財産です。私はあんまりチャンスがなかったけれど、この松林はデートスポットにもなっていた場所だったんです。こんなふうに関わった松林と海というロケーションは若手でもあまりないですから、夏は海水浴場としても賑わって。誰しもから親しまれるような松林だったということに気がきました。

しかし、東日本大震災の津波で、7万本もあった松林はかろうじて1本残って、それ以外は津波ですべてなくなっただけです。

が委託した業者が植樹しました。高田松原を守る会には、市民だけでなく全国から2万人を超えるボランティアが集まりました。あの応援パワーがあったからこそ高田松原の再生に漕ぎつけられたので、そういう意味においても協力して下さったみなさんには本当に大きな感謝をしています。

美しさは人々の手で守られている

30〜40年前ですかね、仙台空港から広島空港まで行ったときに、飛行機の窓から、山の中にポツンポツンとこう、なにかの木が枯れて残っているのが見えたんですね。東北のほうではこういう山はないんだけどなあと帰ってきた記憶があって。それから何年かして岩手県内にもその被害が



市内外からボランティアが訪れ、植樹や保全活動を行っている

景観が変わってしまったので、名勝指定が解除されてしまうのではと心配になり、文化庁に問い合わせました。そしたら「地形が残っているので、解除することはありません」と確認できたので、一生懸命植林作業に努めたという流れです。とにかく高田松原を再生しなきゃという思いが私らにはあったので、名勝指定の解除をされないという言葉が活動の支えになりましたね。また、震災を契機に名勝指定されているほかの松原を視察に行く機会があって、静岡県三保松原や佐賀県の虹の松原を見てきました。高田松原は2キロメートルの砂浜で規模としては小さいけれど、この地域の大事な風景だったことを再確認しました。

被災後、真っ先に取り組んだのは

この先がどうやって再生していくかの目処も立たないうちに、高田松原を守る会は真っ先に市内の松林に行って、松ぼっくりを拾いに行ったんです。そこから種を取って、植樹できるほどの苗木になるまで育てたんです。30センチメートルくらいになるまで、3〜4年はかかりました。それとね、たまたま高田松原の西側のほうに一部残った砂浜があって、ハマエンドウやニッコウキスゲなどの海浜植物が奇跡的に残っていたんです。復興工事が入れれば重機で倒されてなくなってしまうかもしれない

渡ってきて、松食い虫の影響で松が枯れているということがわかりました。いよいよ高田松原にも松食い虫が入ったというとき、市はいち早く駆除活動をはじめたんです。高田松原が貴重な財産ということで行政も予算を組んで、枯れた枝を打ち落とす防除作業を、毎年ね、震災前までしていました。高田松原のあの美しさは、こうして人々の手によって守られているということを実感しました。

もともとここには高さ17〜20メートルほどの松がありました。その高さや太さにまで育つには50年はかかると言われています。松林は成長に合わせて枝打ちや間伐を行い、日照りや本数のバランスを整える必要がありますが、こうした作業には切った枝や材木の処理の問題がつきまといま

でも、行政との協議で、産業廃棄物の運搬・処理資格を持っている業者でないと、間伐材の処理作業ができないことがわかりました。ならば私たちが奉仕の精神でやろうとつって、資格がなければ枝1本でもここから勝手に持ち出すことができないんです。国立公園の一部であるからこそ、ルールは厳格に守らなければならぬのです。それが、この松原を守りつづけるための前提なんです。

今後は行政が主導で、松林の管理作業をやっていくのだと思いますが、やり方によっては、みんなで手を掛けて植樹した松林が枯れてしまうということもあります。

ということ、私たちが松の苗木を育てるために借りていた畑に植樹して、育てることになりました。

高田松原を守る会の会員たちは、とにかく先駆けて仕組みづくりをしていたということです。この活動をテレビや新聞などのメディアが取り上げてくれて、日本各地の方々からの連絡が多数寄せられました。その頃、全国に向けて会員募集をしていたのもあってつながりがどんどん生まれて、ボランティア要請も受け入れられるようにと、2015年にはNPO法人化して組織を大きくすることにしました。千葉県や東京都内からの支援もあって、私たちの保全活動に共鳴して加勢して下さった方々の存在が、活動のエネルギーになりました。

震災から数年経って復興体勢が整った行政が、いよいよ高田松原に松を植えよう動きはじめました。予算をもとに、県が主導で松を仕入れて植樹をしていくということがわかったので、私たちがこれまで手塩にかけて育てた苗木を使ってくださいとお願いをしに行きました。その結果、県が仕入れた松が高田松原エリアに、私たちが育てた松はエリア外ですが国道45号線沿いに植えられることになりました。行政と高田松原を守る会とで協力をして、4万本の松苗を植樹していくことになりました。

2017年から数年かけて、年に4回ほどに分けて松苗を植えました。守る会で植樹したのは1万本、残りの3万本は市や県

松苗は、この数年で千田さんの背丈を超えるほどに育った



だから、私たちもね、植えた責任もありまして、行政に対して進言していきたいと思っています。

明日は地元の米崎小学校の生徒さんたちが草刈りにきます。私たちから作業ボランティアの募集はしませんが、学校関係の方々が自主的に課外活動として計画を立てられて、守る会に連絡をくださってね。

私たちも将来に向けて保全活動を継続していきたいという思いは強いのですが、守る会の会員さんというのは、私を含めて高齢の方が多く、完全な奉仕活動でやってい



震災後、陸前高田市には高さ12.5メートル、幅2キロメートルに渡る巨大な防潮堤が建設された



防潮堤建設のため、高田松原の植樹エリアを狭めることになり松林の数は7万本から4万本になった

ますから、次の役員に手を挙げる人がなかなかいないんです。植樹も終えて、守る会が率先してできる活動もこれから少なくなるわけだからそういう部分も含めて組織としてどう活動していくかが課題ですね。

今のところまだ植樹が終わったばかりなので、一般の方は出入りを規制されているんですね。あの場所が素晴らしいというのにはみなさんわかっていると思います。今後は、憩いの場所であった昔の松原のように活用してもらえればな、ということをお願いしています。

聞き書き
島山信さん

牡蠣漁師が始めた「森は海の恋人」 森を育て、人を育て、そして……



「森は海の恋人」という言葉をご存知でしょうか。宮城県・気仙沼の牡蠣漁師、島山重篤さん（故人）が水質悪化に危機感を抱いてはじめた植樹活動がもたらした言葉で、小中学校の教科書でも取り上げられています。現在、この活動を引き継いでいるのは、重篤さんの末っ子の信さん。NPO法人森は海の恋人として「環境教育」「森づくり」「自然環境保全」の3分野を軸に、これまで森を育て、人を育ててきました。そんな信さんが次に育てようとしているものとは？

はたけやま・まこと / 1978年、宮城県気仙沼市唐桑町西舞根生まれ。高校を卒業後は東京の東洋工学専門学校（現：東京環境工科専門学校）へ進学、卒業後は屋久島で県の施設に就職し、環境教育に携わる。退職後も、屋久島でガイドや生物調査をしながら2年ほど暮らしたのち、2004年に故郷へUターン。現在はNPO法人森は海の恋人理事長として、体験型を重視した環境教育事業を中心に取り組んでいる。

牡蠣漁師による植樹活動 「森は海の恋人」の始まり

気仙沼湾は、森の養分を含んだ大川が注ぎ、牡蠣の養殖が盛んな漁場です。祖父がこの場所ので牡蠣の養殖をはじめ、私たちの代で3代目となりました。私は4人きょうだいの末っ子で、今は牡蠣漁師をしながら、NPO法人森は海の恋人の理事長をしています。この組織は父・重篤が立ち上げた「森は海の恋人」という活動を法人化したもので、環境教育・森づくり・自然環境保全の3分野で事業を行っています。

「森は海の恋人」は、もともと1989年に「牡蠣の森を募る会」として発足しました。牡蠣にもいわゆる高度経済成長のあおりを受けていた時代があって、1960年代ぐ

らいから、気仙沼海域の水質が悪化したんです。いわゆる赤潮ですね、色の赤いプラントンが大発生しました。牡蠣は1日に200リッターぐらいの海水を吸い込んで吐くので、身が赤色に染まってしまったんです。「血液のような色の牡蠣だ、血牡蠣だ」と焼却処分された出来事があって、「これはなんとかせにやいかん」となったのがうちのおやじの時代です。

そのことがきっかけの一つとなって「漁師が山に木を植える」という活動が始まりました。当時は「あいつらなにやってんの？」みたいな懐疑的な目で見られることが、よくあったようですね。

最初は山の人たちと海の人たちが集まる総勢100人ぐらいの植樹イベントだったんですけど、どんどん参加者が増えてきて、最大1500人ぐらい集まるほどになりました。

森そのものを育てる以上に、 大きな力を持つこと

父は植樹活動と一緒に、教育活動もしていたんですよ。山の方の木を植えている地区、室根の子供たちを養殖場に招いて、船でイカダまで連れていき、牡蠣とかホタテを食べてもらって。「これが育つためには、プラントンが必要だよ、プラントンは生育するためには、山からの栄養が大事だね」みたいな話を伝えるようにしていた。その結果、室根の子供たちが、「海のために

なにかできないか」と親に伝えるわけです。その地域に暮らす親はほとんど農家ですから、子供から言われてむげにもできずに、じゃあ農薬を減らしてみるかとか、そういうきっかけになったようです。なおかつ、植樹祭で外から人が来るようになったので、「凜とせにやならん」みたいな雰囲気か村中に漂いはじめたそうです。

そうなったときに、木を植えることは大事ですけど、森そのものを育てる以上に、人の考え方や行動が変わることのほうが大きな力を持つ、ということに父も気づき始めて。今ももちろん植樹祭は継続してますが、教育活動に重きを置くようにしています。

うちの父は、漁師なんですけど、ものを書くんですよ。今年4月に亡くなりましたけれども、生前20冊以上の本を書いたんです。それがたまたま学校の教科書に取り上げられるようになって。そうすると、大人よりも子供のほうがよく知ってたりするんですよ。子供から親に対して、いろいろ提言や疑問が発せられるようになった結果、「森は海の恋人」という言葉が広がって。そのうち各国の言葉に翻訳され、海外へも広がってきました。

虫が好きで人間が苦手だったのに 人に興味が出た理由

そういう活動もしているし、両親とも牡蠣の養殖をやっていたし、バブルの忙しい時代です。私たちがきょうだいは、祖父母と過

島山重篤さんが書いた文章が掲載された教科書



ごす時間が長くてですね。祖父母は、やんちゃな子供相手になをしていたかという、主に自然体験ぐらいしかありません。目の前が海なので、夕食を釣りに行くこともあれば、山でマツタケをとったりとか、祖父は猟もしていたので、それについて行ったり。そういうワイルドな体験が幼少の頃には多かったです。虫が好きだったので、1人で山のなかに遊びに行くこともありました。誰かしら近所の人が山に入っていくところや帰ってきたところを見ていたんですね。当時はまだそういう安全管理が起きていなかったので、虫が好き

だったので、高校卒業後は環境保護活動家のC・W・ニコルが実習長をしていた東京の東洋工学専門学校へ進学しました。昆虫の分類と生態をやりたかったので、学生時代には屋



牡蠣養殖用のイカダが並ぶ漁場



信さんの生家(写真中央)は、海から目と鼻の先にある

もしろさを味わってしまったので、人を研究対象にしたいと思ったんです。

Uターンしてから 生まれた場所の豊かさを あらためて知る

屋久島には通算5年ぐらいいたんですけれど、ここに帰るきっかけは、研究教育というジャンルで人と関わりたいと思ったから。農業や林業と環境教育を組み合わせた活動は珍しくありませんが、漁業と環境教育が結びついているケースはほとんどなかったんですよ。たまたまうちの実家が牡蠣漁師だったこともあり、これはおもしろいかもと思って、2004年に気仙沼に帰ってきました。牡蠣漁師としての修行をして、一応独立して。それまで「森は海の恋人」は任意団体で活動していたんですけど、2009年にNPOの法人格を取りました。

久島で調査をして、論文を書いて。南の島は東北では見慣れないいろんな生き物がいますから、私にはワンダーランドのようでしたね。卒業後は、屋久島でインストラクターの募集があったので、県の職員として就職しました。そこは3年で辞めると、生物調査の仕事しながら、教育関係の団体が主催していた子供キャンプの事業にスタッフとして関わるようになりまして。私が昆虫を専門にしていた理由は、人が苦手だったから(笑)。でも、子供と接しているうちに人に興味が出ちゃったんですよね。子供たちに昆虫採集をさせたとき、その行動パターンが非常におもしろいなと。人間って心理と行動がミスマッチする部分が多いんですよ。その、よくわからないお

震災ですべて流され 新たに生まれたもの

東日本震災があったのは、NPOを立ち上げた3年後のことです。生家があるのは、あの高台。震災のときはあそこの高さまで波が上がったのですが、うちの実家はギリギリ床下だったんですよ。集落内の人たち、みんなうちの実家に避難してきました。全部流されて、イカダもゼロでした。津波は、いろんなものをかく乱したり、流したりする現象。自然っていうのは、そういうもんですから。海辺はだいたい津波が来るものなんです。

津波でハード系を全部失ったのですが、なものでもないわけにはいかない。当時は節電が呼びかけられていて、大学では電気を使う研究が進まない状況が続いていました。そこで私から研究者たちに、「一緒に調査をしましょう」と呼びかけました。すると、車に飲み物や食べ物、調査器具を積んでここへボランティアで来てくれて。研究者たちとの調査が始まりました。津波がいろんなものを流してしまい、ひどい色をしたので、ここでまた養殖ができるかを相談して、いろんな先生方と海域の調査が始まったのが、2011年の5月でした。

そんななか、塩性湿地が見つかったんです。場所はこの湾の一番奥のさらに奥。そこは1940年代ごろまでは天然の干潟だったんですが、戦後の食糧難の時代に埋め立てられ

少種もいたりして。

こういう調査のデータや手法は、教育に反映することができません。あと、データはエビデンスになっていくので、たとえば、まちづくりにも役立ちます。「自然保護・保全をベースにまちづくりするならどんなふうにするか」というときなんかには、大きなデータになります。地盤が沈むってことは、海辺の地形も変わるので、景色が変わるわけです。潮の流れや水の移動方法も変わるので、「東日本震災前と同じ海か」と問われると、絶対にそんなことはないですね。海水温の上昇を抜きにしても、別の新しい海に生まれ変わった感じがしますね。地形が変わるのは、そのぐらいのインパクトがあることだと思います。

父が最後に調べていた、 「ヒューマン」の語源

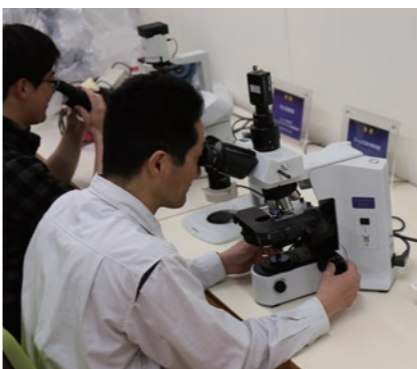
震災の後、子供たちは海から遠ざかってしまいました。親が、子供を海に近づかせないんですよ。その理由は、親が自然に対するリスク管理ができない世代になっているから。だからこそ、世代それぞれに向けた形で、環境教育を考えていく必要があると思っています。そういう背景もあり、我々のNPOでも今後、親子で参加できる宿泊型体験学習を計画しています。

教育活動をしていると、生き物が嫌いな人にも出会います。嫌いなのはしょうがない

て田んぼになった場所です。でも稲作には適さなくて、すぐに耕作放棄地となってしまいました。でも震災で気仙沼は平均70センチメートルぐらい地盤が沈んだので、そこがもとの干潟のような状態に戻ったんです。そこを調査していると、いろんな出来事が同時に多発的に起こりつつ、時間の経過とともに生息する生物種が変化していくんですね。それをモニタリングしています。そのなかには希



アサリのコドラート調査(面積あたりの個体数の回復過程を評価)をする信さん(中央)と重篤さん(右)



海水を濾してプランクトンを検視する研究者。研究で得られたデータは行政・地域と協働した河川護岸工事などに役立っている

ですよ。ただ「必ずしも害のある生き物ではない」ということは覚えておいてね」というのと、「透明度が高ければいい海っていうわけじゃないんだぞ」というのは伝えるようにしています。「きれい」、「汚い」という人の感覚と、その海が生きものにとって豊かかどうかは必ずしも一致しません。だからこそ、なんでそう見えるのかちゃんと考えてみてよと、親にも子にも伝えていきます。

先日、重篤が最後にどんなことを考えていたのかを知る機会がありました。遺品の手帳の中に「腐葉土」という言葉があって、その下に「ヒューマン」と書いてあるんですよ。ヒューマンの語源はラテン語で「フムス」という単語。フムスは「大地」とか「腐葉土」のことを指します。腐葉土って、生命を維持するとか、育成させるとか、再生の象徴なんですよ。父の理想的な生きざまは「人を育てる腐葉土のような存在になりたい」ということだったようですね。

そうした思いは引き継ぎつつ、父がやってなかったところでいうと、「地域も育てたい」という思いが私のなかにはあります。人を育てるのは人です、人の集団は「地域」ですから。地域を育てるには、やっぱりお金が必要なんです。私としては、人と地域を持続可能に育てていく手段の一つとして、自然保護・保全を位置付けたい。自然環境の多様性が保たれている状態が持続すればするほど、その地域内にお金が継続的に回るとい仕組みを、今まさに作っているところですね。



NPO法人森は海の恋人と京都大学フィールド科学教育研究センターで管理運営される「舞根森里海研究所」にて。番屋としての機能と教育施設、研究所としての機能を併せもつ、ユニークな施設

編集後記

三陸で暮らす人々にとって、海は長い間、生活を支える恵みであり、同時に大きな脅威をもたらす存在でもありました。東日本大震災は地域に深い傷を残しましたが、その後の歩みを追うなかで見えてきたのは、「この地で再び生きていく」という確かな意志と、人々が自然と向き合い続ける姿でした。

漁業、観光、保全活動など、さまざまな営みが地域を支えています。海と共に生きる人、森を育てる人、訪れる旅人を迎える人。それぞれの取り組みは異なりながらも、三陸の未来をつくる大きな循環としてつながっています。各地を訪ねるなかで、自然の豊かさだけでなく、それを守り育てようとする人々の姿が、この風景を支えていることを強く感じました。

本誌で長谷川晋さんが語った「歩く速度は、今を感じられる『歩の速度だ』』という言葉が印象的でした。歩くことで人の営みを知り、大地を知り、これから先どのように生きていくのかを考えるきっかけになる。忙しさや効率を優先しがちな社会において、これほど重要なメッセージだと感じます。「みちのく潮風ト

レイル」という文化は、そんな「歩くこと」から始まっています。人と人、人と自然がつながり、その関わりの中から新しい価値や物語が生まれていく。歩く人、迎える人、そして海や森に寄り添いながら生きる人々の姿が、この先の三陸復興国立公園をかたちづくっていくのだろうと実感しました。

本誌は、三陸復興国立公園の歩みや、地域に根付く文化・挑戦を今の姿として記録していくことを目的としています。今回の制作には青森県八戸市に縁のあるライター、カメラマン、エディターが携わり、その視点をこの冊子に落とし込むことができましたと感じています。これらの物語を通して、この地に根付く文化や人々の姿が、次の世代へ受け継がれる一助となれば幸いです。

寄せては返す波のように、三陸の営みはこれからも続いていきます。その力強い循環のなかに、地域を照らす希望の光が宿っていることを信じています。

株式会社オールアバウト
一般社団法人ドット道東

三陸復興国立公園 記憶を未来へつなぐ 復興の海岸線 国立公園ものがたり

発行月 …………… 2026年3月第1刷発行

発行元 ……………

環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館

TEL 03-5521-8271

<https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/>

企画元 ……………

株式会社オールアバウト

東京都渋谷区恵比寿南1-15-1

APLACE恵比寿南3F

<https://corp.allabout.co.jp/>

編集元 ……………

一般社団法人ドット道東

北海道北見市柏陽町5926 KIT FRONT内

<https://dotdot.com/>

全体管理 ……………

土居里佳

編集主幹 ……………

名塚ちひろ

編集・制作進行 …… 百目木幸枝 (再考編集室)

デザイン進行 …… 名塚ちひろ・吉田拓実

アートディレクション …… 名塚ちひろ

デザイン監修 …… 鈴木美里

デザイン …… 村上三千雄 (VILLAGEUP)

執筆 …… 栗本千尋

百目木幸枝 (再考編集室)

松浦奈々

撮影 ……………

蜂屋雄士

イラスト …… 井上愛美 (Caschi合同会社)

校正 ……………

山本小詩

写真提供 ……………

いわて震災津波アーカイブ／

提供者・陸前高田市観光物産協会

いわて震災津波アーカイブ／

提供者・岩手県沿岸広域振興局大船渡土木センター

NPO法人体験村・たのはたネットワーク

NPO法人高田松原を守る会

環境省

階ケイティ

長谷川晋

島山信

柳沢卓美



東北